

経営学説史の研究(3)

—科学史としての経営学説史研究の方法：エクスターナルアプローチ導入の試み—

大 平 浩 二

4. インターナルアプローチとしての経営学説史研究の方法

4-1. 経営学説史研究におけるインターナルアプローチの方法

前回¹、わが国の経営学研究の特徴として「プレ・インターナルアプローチ」について紹介した。これは、クーンが指摘した2つの科学史研究の方法のうちの1つであるインターナルアプローチを振った造語であった。

このプレ・インターナルアプローチ（文献史的方法や解釈的方法）とは別に、わが国においてもインターナルアプローチとしての学説研究は、一部の研究者においては活発に行われてきた。そこで本稿では、まず、インターナルアプローチすなわち「〈3〉特定の科学哲学（方法論）に基づく学説史研究」の土台となる「特定の科学哲学（方法論）」として論理実証主義や批判的合理主義といった近年のドイツ経営経済学に大きく影響を及ぼしてきた科学哲学を検討することとする。そして次に、その方法論的立場を標榜する（した）研究者の学説研究を取り上げることによって、このアプ

プローチの特徴をより明確にするとともに、その課題も明示することとしよう。なお、本稿で取り上げる経営学の範囲がややドイツの経営経済学に比重が移ることも再度お断りしておきたい²。

わが国の経営学説史研究（とりわけドイツ経営経済学）において見られる（た）科学哲学の影響の中で、まず挙げられるのがヴェーバー（Weber, M.）と、19世紀から20世紀にかけて主としてドイツ（語圏）において影響力を持った新カント派（[Neukantianismus] なかでも西南ドイツ学派 [West-Süd Schule]）であった。

ドイツ経営経済学において議論されてきた「経験対象 (Erfahrungsgegenstand)」「認識対象 (Erkenntnisgegenstand)」「そして「選択原理 (Auswahlprinzip)」という用語は懐かしい響きをもっている。しかしながら、今日のドイツにおいては（おいてさ）経営経済学者にせよ、(国民) 経済学者にせよ、はたまた他の分野の研究者にせよ、この立場に身を置く研究者はほぼ皆無であり、新カント派はその名前をほとんど歴史において残すのみとなっている³。と同時に、その当時ドイツの経営経済学において議論された、「理論学派」「技術論学派(応用学派)」「規範論学派」という分類自体、1950年代から60年代

以降の論理実証主義や批判的合理主義等の近年の科学論の展開の中で大きく色あせてきたことも事実である。

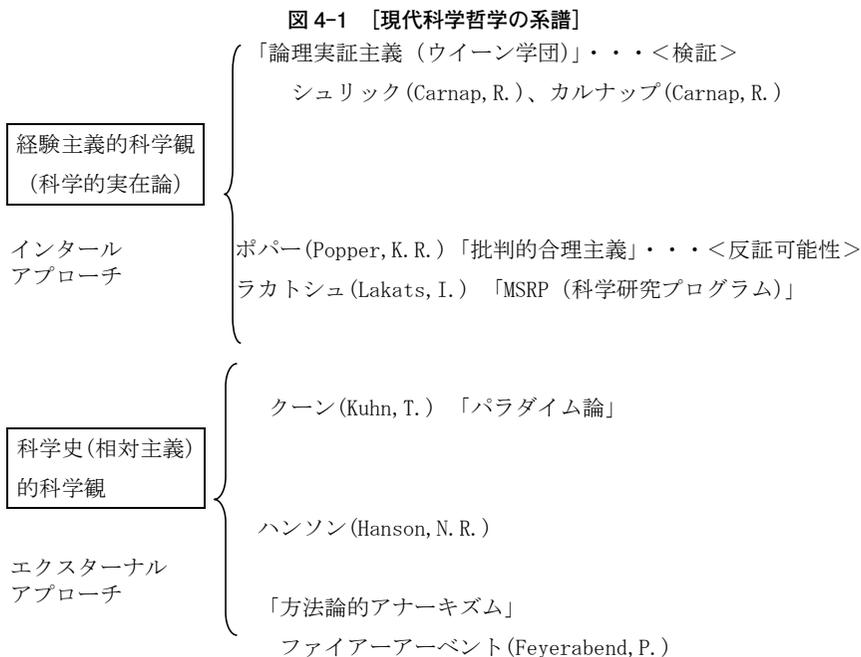
近代科学の基本的な特質は、自然科学にせよ社会科学にせよ近代以降の経験主義にある⁴。われわれは、いわゆる啓蒙主義などを経て誕生した近代科学のもたらした成果に関しては、この経験主義的思考が大きな貢献をしたと考えている。そしてまた、経営経済学に関しても、この経験主義のもっとも典型的な例は「論理実証主義 (logical positivism)」と「批判的合理主義 (critical rationalism)」そしてこれらの後継者達に求めることが出来ると思われる。併せて、これらの考えが、経営経済学（そして広く経営学）においても大きな影響力を持って（来た）いることも周知の事実である。沼上 幹のいう「実証主義のバイアス」は、図らずもわが国における（否世界的な）実証主義への偏重に対する警告と理解出来る⁵。

さて、以下においては 20 世紀後半以降におい

て広く科学の世界に影響を及ぼしている「論理実証主義」と「批判的合理主義」を中心にそれらの検討を行いつつインターナルアプローチを検討してみることにしよう。なお、図 4-1 は 20 世紀半ば以降の主要な経験主義科学論の系譜を概略的に図式化したものである⁶。ここでは、論理実証主義ないし批判的合理主義のいずれかを標榜する立場を、経営学説史研究のインターナルアプローチとして位置づけ、（一応）科学史（相対主義的）科学観をエクスターナルアプローチとして位置づけておこう。ただし本稿で意味するエクスターナルアプローチは、クーンやハンソンなどの考えを一部採用するが、それらを忠実に引き継ぐものではない。

4-1-1. 論理実証主義

論理実証主義は別名「ウィーン学団 (the Vienna Circle)」といわれるように、1920 年代半ばにウィーン大学で誕生した主に哲学者を中心とし



た研究グループに端を発する。当時のメンバーとしては、シュリック (Schlick, M.) を中心に、カルナップ (Carnap, R.), ノイラート (Neurath, O.), メンガー (Menger, K.), ハーン (Hahn, H.), ファイグル (Feigl, H.), ヴァイスマン (Waismann, F.), チルゼル (Zilsel, E.), クラフト (Kraft, V.) フランク (Frank, P.), ゲーデル (Gödel, K.), ミーゼス (Mises, v.R.) そして物理学者であったがドイツのマッハ (Mach, E.) 等があげられる。因みに、後に見る論理実証主義に対する代表的批判者の一人であるポパー (Popper, K.R.) は、この当時はこのウイーン学団の周辺にいた⁷。

彼等の初期の考えは、1929年に出版された『科学的世界観—ウイーン学団— (Wissenschaftliche Weltauffassung—der Wiener Kreis—)』と題する綱領において発表されている。この綱領の内容も含めて、彼等の基本的な研究の方向は3つに分類される。1つは「命題の意味」、2つはその判定基準である「検証 (verification)」, そして3つは「統一科学」に関わる問題である。ここでは、論理実証主義の特徴を一般的に知られている範囲で素描してみることにしよう。

この「命題の意味」の問題は、ヒューム (Hume, D.) の問題意識に端を発しているが、ここで意味のある命題、というのは事実に対応する命題を指し、意味のない命題というのは事実に対応しない命題、すなわち形而上学的命題を指す。

そして彼等は、科学的命題から形而上学的内容を排除し、個々の現実についての命題である経験的命題を構築することを基本目的としている。この「意味のある命題」は2つに分類されるが、その1つは個々の事実についての命題で「真・偽」が明確になる「経験的命題」である。この経験的命題は、個々の単称観察命題 (singular observation statement) から成立する、という論理的

子論 (logical atomism) によって支えられている。その際問題となるのは、その命題が「真」 (truth) であるか「偽」 (false) であるかをいかにして見分けるか、ということになる。基本的には、現実についての命題 (言明) は、単称言明 (singular statement) たる独立の観察言明から成り立っている。そこでこの観察命題 (言明) の意味論的分析を行うこととなる。

さらにもう1つは、命題の文章上の形式から「真」と「偽」を判断する場合である。これは命題の構文論的分析であり、形式科学の領域に属することとなる。例えば、論理学や数学がこれに該当する。従って形式科学であるので、この場合の真はより正確には「形式的真」ということになる。この形式的真はまた論理的真とも言うが主として「同語反復 (tautology)」に関わる側面である。彼等はこうした命題も現実に関係する意味ある命題であるという。ただ、この論理的に真である命題は、そもそも形而上学であるので、意味ある命題といえるかどうかは疑わしい。

以上に対して、現実に関連しない「真」や「偽」であることを問えない命題は形而上学であり、経験科学上意味のない命題であるとされる⁸。

さて、論理実証主義において最初の事実に対応する命題である経験的な命題であるか否かを判定する基準が良く知られた「検証」である。ある命題を観察によって、すなわち観察命題 (言明) によってテストし、実際にその通りであればその命題は経験的となる。

ところで、命題を観察によって経験的にテスト可能であるためには、はじめからその命題を現実のデータから作ればよいことになる。このアイデアを最初に取り入れて、科学的知識の構築ないし発見を、個々の事実の観察から始めようと考えた代表者の一人はベーコン (Bacon, F.) であろうが、

この考えを「帰納主義 (inductivism)」, より正確には「素朴な帰納主義 (naïve inductivism)」と呼ぶ⁹。論理実証主義者 (初期の) は, 科学的な命題の構築に際してこの帰納主義を徹底的に活用した。

この「帰納主義」の特徴は, 次の3つに要約できる。すなわち, ①科学は観察で始まる。②観察が科学知識の確かな基礎を与える。③科学知識は観察言明から帰納法によって導出される, である¹⁰。この3つの特徴からすぐわかるのは, 科学的知識の強力な (素朴な) 経験依存性である。

素朴な帰納主義の考えを簡単な例で示せば次のようになろう。例えば, カラスについての客観的な知識を得たいとする。その場合, まずカラスといわれている鳥の観察から始まる。

- i 2015年6月8日の午前10時34分に, 東京都目黒区で観察されたカラスは黒い(かった)。
- ii 2016年6月23日の午後3時12分に, 大阪市東淀川区で観察されたカラスは黒い(かった)。
- iii 2017年10月31日の午前6時29分に, 札幌市中央区で観察されたカラスは黒い(かった)。
- iv 2018年11月28日の午後7時45分に, ドイツのケルン市で観察されたカラスは黒い(かった)。

というように, 幾つかの観察命題 (言明) が用意される。この観察ないし観察結果は, 普通に健康な感覚を持つものであれば, 当該の観察者だけでなく他者であっても同じ内容を確認しうるはずのものである。つまり, いわゆる五感による (一応の) 共通経験が可能である。

この観察命題 (言明) に関して基本的に重要な点は, まず特定の時間・空間的 (時・空的) に限定された事象に関するものである, というこ

である。それらはあくまで個々の独立した一つ一つの事象についての命題である。単称言明といわれる所以である。従ってそれらは, 算定可能な「有限個」の命題の集合でもある。

そして, このいくつかの観察言明を基に「すべてのカラスは黒い」を導出するのである。

そして次に, こうした幾つかの個別事例 (観察言明) から得られた普遍言明 (仮説) を経験的テストにかけてその現実妥当性を確認しなければならない。このテストが先に示した検証である。この手順は, 上の i ~ iv を基に「すべてのカラスは黒い」を導出した手順と同様の様式である。

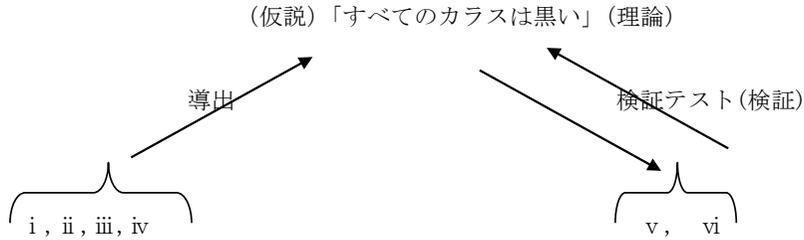
すなわち, 先ほどの i ~ iv とは (一応) 別の日時・場所で再度カラスを観察することとなる。この観察は, 「すべてのカラスは黒い」が本当にそうであるのかどうかの確認ともいえる。

- v 2019年10月8日に上海で観察されたカラスは黒い (かった)。
- vi 2020年11月10日に大阪で観察されたカラスは黒い (かった)。

故に, 「すべてのカラスは黒い」は正しい。というように。

これで仮説「すべてのカラスは黒い」は晴れて「理論」へと脱皮できることとなる。上の手順を簡単に図式化してみよう。

まず図一左側の i, ii, iii, iv は, 各々の観察事例を示している。一般にこれらの仮説の導出については, 「仮説の発見」と呼ばれることもあるが, この「発見」のニュアンスには「偶然の思い付き」とか「たまたまの着想」といったイメージが含まれているので, 実証主義者は使いたくないであろう。さて, これらから仮説「すべてのカラスは黒い」が導出される。この仮説はテストされなければならないので, 別の事例 v, vi と照らし合わせて仮説が妥当なことが確認 (検証) される。そして仮



説「すべてのカラスは黒い」はテストに合格し、晴れて「理論」となる。ちょうど仮免許が路上試験に合格して晴れて正式の本免許となるように。

しかし、この帰納的な仮説の導出とそのテストに関して、この方法では論理的に無理があるのではないかと、いった批判が提示されている。その典型は18世紀にヒューム(Hume, D.)が指摘しよく知られているいわゆる「帰納の問題」(problem of induction)に遡ることができる。

さて、通常科学的知識ないし法則といわれるものは以下の例にもあるように、普遍的命題(universal statement)として示されるものである。

「天文学」→「惑星は太陽の周りに楕円軌道を描いて動いている」(ケプラーの第一法則)

「物理学」→「質量 m_1 , m_2 の2つの物体が距離 r だけはなれているとき、その2つの物体間には $F = G \frac{m_1 m_2}{r^2}$ の大きさの引力 F がはたらく。力の向きは2つの物体をむすぶ直線方向にある」(万有引力の法則)

「経済学」→「需要が、供給(経済活動の水準)を決定する。」ケインズの法則(有効需要の法則)

以上の法則は、現象の性質についての一般的(普遍的)な説明を行った命題である。すなわち、これらが説明している範囲はすべての場所と時間の範囲(つまり無限の広がり)の事象であり、「普遍命題(言明 = universal statement)」と呼ぶ。

さて、一応科学的知識や客観的知識はこうした普遍的な知識を目指すものである、とすれば、先

ほどの個々の観察事例からいかにしてこのような普遍的な命題を導出できるのか、という素朴な疑問(批判)が出てくるであろう。「有限」から「無限」は絶対に(というの論理的には)導出できないからである。

こうした疑問に対して論理実証主義者(素朴な帰納主義者としての)は2つの回答を用意している。1つはできるだけ観察の数と観察条件を多くする、ということである。例えば、われわれがよく経験する例でいえば、100サンプルのアンケート調査と、10,000サンプルのアンケート調査では、後者のほうがより正確(らしい)であると思うものである。2つめは、そうした観察例は、今までに観察された範囲では矛盾しなかった、という回答である。

しかしながら、この2つ回答は基本的な難点を抱えている。それは、まず観察命題の数が多いほうがよい、という場合、では「いくつならいいのか」という問題が依然として残っている。この決着は少なくとも論理的には解決しない。結局は、それを選んだ者の主観や他の理由にゆだねられることとなる。そして2つ目は、今までの観察という「過去」についての経験の範囲を言っているだけであって、将来の予測が含まれていない。これから生起するであろう将来(という現実)の現象に関しては何も語って(説明して)いないのである。科学的説明の重要な役割の1つは将来についての予測でもある。

にも拘わらず、彼等は「帰納の原理」によって自らを正当化しようとする。この原理とは「もし、多数のAが多様な条件のもとで観察され、すべての観察されたAが例外なく性質Bをもっていたならば、すべてのAは性質Bをもつ」というものである¹¹。

もう1点付け加えておけば、彼等には、こうしたより多くの観察命題(言明)の蓄積が科学(的知識)の進歩につながる、という考えがあることである¹²。

しかしながら、この「帰納の原理」が成立しないことは今や自明のこととなっている。というのは、そもそも帰納の原理は論理的に、そして経験的に正当化できないからである。そしてこのことは、仮説のテストで用いられた検証についても同じように当てはまる。例えば、前者の例で言えば、論理的に妥当な論証は「その前提が真であれば結論も真である」というものである。しかし、今までに観察された多くの観察事例が同じ結果であったとしても、次に来る結果が同じであるとは限らない。例えば、

- 前提：i 場所 p 時間 t において黒いカラス A が観察された。
ii 場所 p1 時間 t1 において黒いカラス B が観察された。
iii 場所 pn 時間 tn において黒いカラス N が観察された。

↓ (ゆえに)

結論：「すべてのカラスは黒い」

しかしながら、前にも述べたように、次に観察するカラスが黒い、という論理的保証はどこにもないのである。もし黒くないカラスが現れたら、「すべてのカラスは黒い」という結論は偽となる。推論のすべての前提が真であったとしても、帰納的推論が偽の結論を導出したこととなるのである。

もう1つは経験から帰納の原理を導出できるかどうかを見てみよう。これは、実際の事例において帰納の原理がうまく働いていることを根拠とするものである。例えば、

- i 帰納の原理が A1 のケースでは妥当した。
- ii 帰納の原理が A2 のケースでは妥当した。
- iii 帰納の原理が An のケースでは妥当した。

↓ (ゆえに)

帰納の原理はつねに妥当する。

しかしこの説明はいわゆる循環論法である。というのは、帰納的な論証の正当化の証明に同じ帰納的方法を用いているからである。これでは正当化のプロセスが無限に続くこととなる。この問題は前述の「帰納の問題」としてすでにヒュームによって指摘された問題でもある¹³。そして、この帰納主義に対する現代のもっとも強力な批判者が後に取り上げるポパーである¹⁴。

以上のような素朴な帰納主義は、確かに観察に基礎を置くだけに、一見すると訴える力を持っているように見える。確かに、経験則といわれる内容は、われわれの日常生活においては一定の影響力を持っている。しかしながら、この「素朴な帰納主義」は科学史・科学哲学の世界ではすでに終わったものであることに注意が必要である。

以上のような帰納主義の特徴、すなわち、「①科学は観察で始まる。②観察が科学知識の確かな基礎を与える。③科学知識は観察言明から帰納法によって導出される」に対する批判のうち、③の帰納法については、既に見たとおりである。次に、①と②に対する強固な批判を見てみよう。

その1つは、いわゆる「観察の理論依存性(The Theory-Ladenness of Observation)」ないし「理論負荷(theory-ladenness)」である。帰納主義のこの①と②の考えは、科学の領域は、観察から始まる(観察というプロセスを含む)ということ

と、仮説や理論は現実のデータから直接作られる、ということであった。

この考えに根本的な疑問を提示した代表者の一人がハンソン (Hanson, N.R.) であった。彼は現実を観察するということは、現象が「眼球に達すること以上のこと」であると言う¹⁵。すなわち、現象の観察は、(まずは) いわばカメラによって写された被写体がフィルムの上に写されるように、人間の目の中にあるレンズと網膜に直接現実の像が映し出されることである、と。

しかし人間の場合は、その次の段階から(恐らくはほぼ同時に) 別の処理が脳の中で行われる。すなわち、その像にたいする記録と解釈である。この段階において、各々の観察者による異なる解釈と記録が生じることとなる。換言すれば、観察者達は網膜上では同じものを見ていても、視覚経験という意味では必ずしも同じではないのである。例えば、ハンソンが示しているようにいわゆるだまし絵やゲシュタルト心理学においてよく出される例示を挙げている¹⁶。

われわれが卑近に経験する典型的な例として、レントゲン写真のケースがある。医学的知識のないわれわれが、例えば胸のレントゲン写真を見ても、健康な人の写真と病気を持った人(重症でない)のそれとの区別はまずつかない。ぼんやりとした心臓の形であるとか、肋骨や肺の形状くらいは判断がつくが、それ以上の、例えばいくつかある小さな円状の空洞や白く濁った雲のような影が何であるかの判断は不可能である。もっとも、医師免許を取ってすぐの新米の医者であれば、その空洞が血管の断面であることや、雲のような影が写真現像時に固有のものであったり、筋肉や皮下脂肪によるものである、といった程度のことは容易にわかるであろう。しかし多くの新米の医者は、

は無力の場合が多い。まれな疾患であれば猶更であろう。それが識別できるようになるには、更なる経験と知識が必要である。また、ある程度の経験があっても、領域が別の医者であれば、一例えば皮膚科や眼科といったような一高度な診断は難しいであろう。

このことは、上に述べた視覚経験において、まさにそこには個人々人別々の知識や経験、換言して言えばそうした知識の基礎となっている「理論」の違いが存在していることを意味している。

すなわち、観察は個人々人それぞれ別の解釈によって成り立っていると同時に、また同じ人間であっても、その知識の質量変化によって変わるのである。これが、上にも示した今日ではよく知られている「観察の理論依存性」ないし「理論負荷」である。この理論負荷に関連して、いみじくも Popper が指摘しているように「科学的思考は、見えるものを見えないものの指定によって解明する」点は根本的に重要な指摘である。つまり、「現実」を「現実」で「説明」するのではない。「見えるもの」(現実)を「見えないもの」(仮説や理論)を用いて説明することであるが、まさにこの仮説や理論はそれぞれの研究者が背負っている理論とそれを導き出した背景に基づいているのである¹⁷。このポパーの言と理論負荷とはある意味で同じことを別の表現で表していると言えようか。この理論負荷については後述することとする。

更に、観察言明を重要視する帰納(ないし実証主義)主義者にとって、もうひとつの問題が存在する。それは、観察言明そのものが正確ではない、ということである。従って、それを基に仮説や理論を作っていくという帰納的な方法は、かなり危うくなるのである。

上に示した例を用いれば「目黒で2015年6月8日に観察されたカラスは黒い(かった)」という

観察が正確かどうかを見てみよう。この場合、個々の状況を確認してゆくと、この観察が必ずしも正確かどうかは直ちに判断できないことに気づく。

例えば、このカラスを見た場所が本当に目黒区であったのかどうか、という問に対して、もし観察者が JR 目黒駅のカンパンの上の黒い鳥が写っている写真を根拠に挙げたとしよう。多くの人は、ここで場所（目黒区）について納得するかもしれないが、何人かの人は、それが誤りであることを指摘するだろう。なぜならば、JR 目黒駅は目黒区ではなくて、品川区にあるからである。

観察は道具を使うことが普通である。医学・生理学や科学、生物学における顕微鏡は身近な例である。この例で有名であるのは、野口英世の黄熱病の病原菌発見の誤りである。後に明らかとなったように彼の時代の光学顕微鏡ではウイルスである黄熱病の病原の発見は不可能であった。黄熱病の病原であるウイルスの発見（観察）は電子顕微鏡の誕生を待って初めて可能となるからである。しかし更に、こうした道具の発展は更なる問題をも抱え込むこととなる。すなわち、そのような測定ないし観察道具の高度化とともに、測定や観察の誤差がどうしても生じてしまうことである。この類の問題は探してみれば数多く見つかるだろう。

次に問題となるのは、写っているその鳥がカラスかどうかである。観察者はまず、その鳥の特徴とカラスについての一般的な説明を照合しようとするであろう。その場合、まず一般的によく用いられる説明としては、「スズメ目カラス科カラス属およびそれに近縁の鳥の総称。日本では主としてハシブトガラスとハシボソガラスの 2 種。雌雄同色、黒くて光沢がある。多くは人家のあるところにすみ雑食性。秋冬には集団で就眠。……」¹⁸とある。

しかしここで次の問題が生じる。すなわち、カ

ラスには少なくとも「ハシブトガラス」と「ハシボソガラス」の 2 種類が生息している、ということである。では、目黒、いや品川区で観察されたカラスはいずれのカラスであろうか、あるいはもしかするとそれ以外の種類のカラスであるのか、という問題が生じる。これに答えるには、より専門的な知識（ないし理論）が必要である。例えば、鳥についての専門の鳥類辞典を紐解くと、さらにカラスには……となる。

以上のように、日常の観察でさえ、それを正確に確認しようとするとき徐々に専門知識を必要とし、その妥当性を批判しようとするときますます多くの理論（的知識）を必要とする。この必要性への要求は、場合によってはほとんど無限に近いかもしれない。

上に述べてきたことは、観察する人間能力の限界とともに、例えばいわゆる「観察者効果 (observer effect)」やハイゼンベルクの「不確定性原理」に関連する大きな問題を示している。このことは、いずれにせよ帰納主義者が考えていたこととは逆の事態である。

以上から、少なくとも素朴な帰納主義に対する擁護は鳴りを潜めることになるだろう。後に実証主義は統計論や確率論へと方向転換するが、それについては本稿では扱わない。

いままで述べてきたことは、①と②の見解、すなわち科学的な観察は現実ありのままを見なければならぬとか、いかなる先入観も持たずに現象を観察しなければいけない、とかそうした無私の眼でみて初めて客観的な科学的知識を得ることができる、といった以前から語り継がれてきた主張を大きく覆すものである。

この点に関してポパーは、「発見のプロセス (process of scientific discovery)」と「論証 (正当化) のプロセス (process of justification)」を

区別することによって、1つの解答を出している。すなわち、理論—この場合は往々にして仮説と呼べようが—を発見する（すなわち獲得する）過程は論理的かつ一義的には決められない、というものである。論理実証主義者がいうように、帰納法という方法が唯一のものではなく、むしろ理論や仮説を導出する過程はある意味で閃きや着想であり、多様であってよい、という考えである。もっとも論理実証主義者にもこの考えに賛成する者もいないわけではない。

この考えの例で一般的に有名であるのはニュートンのそれで、誰でも知っているリンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見した、という逸話である。真偽のほどはともかく、有名な理論が研究室や書斎以外のところで思いつかれたという話は枚挙に暇がない。

ここで誤解してはならないのは、ポパーが観察は意味がないとか、科学にとって何の役にも立たないと言っているのではない、ということである。観察（という経験）は、仮説発見にとってしばしば重要な契機となるからである。

ただ1つだけ確かであるのは、その逆はあり得ない、ということである。すなわち、一般の人がリンゴが木から落ちるのを見たとしても決して万有引力の法則は思いつかない。これは、一般人を経済学者に置き換えても同様である。このことは、0（ゼロ）からは何も生まれない、という格言が正しいことの証明でもある。

更にクワイン（Quine, W.V.O.）は、「総合命題」と「分析命題」を区別することと、論理実証主義がもつ原子論的立場を経験主義の2つのドグマとして批判した。またデュエム（Duhem, P.）は科学的理論は、現象の計算や予測・説明のために利用する道具に過ぎないとする道具主義（instrumentalism）の立場に立った¹⁹。

以上において、論理実証主義のもつ基本的な難点を挙げそれを批判的に見てきた。第二次世界大戦直後より、アメリカを中心に世界的な広がりを見せたこの論理実証主義も、60年代から70年代以降急激に衰退する。これは、ラカトシュ（Lakatos, I.）がいみじくも論理実証主義的方法を「退行的（degressive）プログラム」を呼んだ中に充分意味されている²⁰。

ただ、ここで一点だけ付言しておきたいのは、前章でみたヨーロッパにおける啓蒙主義以降の経験主義的知識観において、この論理実証主義が現代に繋がる科学的知識の源流として一定の役割を果たしてきたことは否定できない事実である、ということである。形而上学的知識と経験的知識を区別することによって、自然科学はいうまでもなく、社会科学においてもその科学性の根拠としての存立可能性の保障をわれわれに与えてきたからである。今日、経営学においても、意識するとしないうちに拘わらずこの論理実証主義の恩恵を受けている人は少なくないはずである。

そして、同じ経験主義の土俵に立ちながらも、論理実証主義を「論理的飛躍」や「退行的」と批判したのが次に見る批判的合理主義の考えである。

4-1-2. 批判的合理主義—認識の進歩

批判的合理主義（critical rationalism）の考えは、論理実証主義を生み出したウイーン学団と異なり、最初はポパー個人によって代表されてきた、といってよい。ポパーは、論理実証主義の中心メンバーであったカルナップ等と同時代人であり、またウイーン学団とは時折接触を持ち、かつまた経験主義という方向においては同様であるが、その科学哲学的内容は大きく異なる。

前項で論理実証主義を批判的に述べたが、この批判的視点は基本的には批判的合理主義のそれと

いてよい。この批判的合理主義すなわちポパーの考えの基本的な特徴は、まず大きく 2 つに分類することができる。それは「科学論」と「社会論」である²¹。一般にポパーの科学哲学が議論される場合は彼の「科学論（反証可能性を中心とする）」が多いであろう。

これら 2 つは後（次章以降）に見るように密接に関連しているが、反証主義（反証可能性）や帰納法批判で知られる側面は、科学論（科学哲学）の問題であり、まさに本章におけるインターナルアプローチに関わる側面である。本章ではこれを先に検討する。「社会論」については次章（次章以降）で取り上げることとしたい。

反証主義、より正確には“反証可能性 (falsifiability)”の考えは、簡単に言えば仮説（ないし理論）の経験的妥当性を、その仮説が実験や観察によって間違いうるかどうかを判定基準とすることによって証明するという考えである。検証が肯定的なテストとすれば、反証は否定的テストといえる。

前項で用いたカラスを例題として再利用すると、以下のように示すことができる。

（前提）2016 年 10 月 31 日の午後 8 時に札幌市中央区宮の森で黒くないカラスが発見された。

↓

（結論）「すべてのカラスは黒い」は誤りである。

この場合、導出された「すべてのカラスは黒い」は誤りである、という結論は論理的に妥当な帰結である。要するに、帰納法において見られた論理の飛躍はどこにも存在しないからである。

このケースと、前の帰納法のケースと比較してもっとも基本的に相違する点は、前にも触れたが、帰納の方法によっては、観察言明をいくら数多く並べても普遍的な仮説を導出し得ないが、後者の方法では、ただ 1 つの観察言明によって仮説が誤

りであることを十分に、すなわち論理的な飛躍なしに証明できるという点である。これが検証と反証（可能性）の非対称性である。言い換えれば、普遍言明は単称言明（観察言明）からは決して導出されえないが、単称言明によって決定的に否定されうる、ということである。

科学、すなわち経験科学はいかに現実を正確に説明（ないし予測）するかがその最大の目的であり、それを確認する手段が経験的テスト（検証や反証可能性）であるとすれば、この 2 つの基準は当該仮説が科学的であるか否かを判定する基準といてよいだろう。そして、あきらかに前者よりも後者のほうが論理的にも経験的にも首尾一貫した方法であることがわかる。そして、そうであれば検証という方法よりも反証可能性という方法のほうがより科学性の判断基準としてはよりよいものと考えることができよう。

上に反証（可能性）テストは否定的なテストである、と述べたが、これは換言すれば不都合な事実の存在（すなわち反証事例）が当初より考えられないような仮説は反証可能ではなく、従って科学的ではない、ということになる。上述のカラスの例で言うと、「すべてのカラスは黒い」という仮説は、「黒くないカラスは存在しない」という言明と同値だからである。

このことは、言明が反証可能であるということは、その言明が「○○は存在しない」という形の言明に変換可能であることを意味している。そして更に、どこかの時空で黒くないカラスが発見されるとその事実は「△△の時空に黒くないカラスが存在する」という単称非存在言明（観察言明）として記録される。この観察された単称非存在言明は反証のための基礎的な言明であるが、この基礎言明からは「黒くないカラスが存在する」が導出される。そうすると、この言明は最初に述べた

「黒くないカラスは存在しない」という言明と論理的に矛盾する。そして、この「黒くないカラスは存在しない」という言明は「すべてのカラスは黒い」と同値であったことを想起しよう。

さて、この「黒くないカラスが存在する」の中の「黒くないカラス」は、発見されるまでは「潜在的な反証事例」と呼ばれる。言い換えれば経験的言明は必ずこの「潜在的な反証事例」を含む言明である。

従って、仮説は経験的テストによってテストされなければならないという経験主義の要求は、反証可能な言明でなければならないということになる。そこでもう少しこの反証可能な言明ということについていくつかの簡単な例を見てみよう。

- (a) 明日（〇〇年〇月〇日）の東京の天気は雨である。
- (b) 水は2つの水素と1つの酸素の分子(H₂O)から構成されている。
- (c) 読売ジャイアンツは来年（〇〇年）のペナントレースで優勝する。

これらはすべて反証可能な言明である。まず、(a)については明日になって、例えば晴れたとしたら明らかに反証できる。(b)については、将来もしかしたら水素と酸素以外の構成要素が発見されるかもしれない。(c)についてもペナントレースが終わって、他のチームが優勝していれば明らかに反証される。

このようにある言明（仮説といってもよい）と矛盾しうる観察（言明）の存在が明示される場合—つまりその観察言明が真である場合—にその言明（仮説）が反証されるのであればその言明（仮説）は反証可能であるといえる。

では、つぎに典型的な反証不可能な事例をみて

みよう。

- (d) 明日の天気は晴れか晴れ以外のどちらかである。
- (e) あなたのこれからの人生は幸福になる。
- (f) 自衛隊がいるところはどこであっても安全なところである²²。
- (g) この物件は、駅から近いところにある。

(d)の説明は絶対に間違っていない。なぜなら、「晴れと晴れ以外」に天気の内容はないからである。換言すれば、「晴れと晴れ以外」は天気の内容をすべて含んでいるからである。(e)の場合は、まず「幸福」の内容がまったくのところ曖昧である。どのような人生になったとしても、「幸福」である、と言っているからである。(f)の場合は、文章の前段の「自衛隊がいるところ」がすでに安全である、という前提となっている同語反復である。(g)の言明は、(かつて)不動産屋の広告によく見られたものであろうが、これも見る人によって近いてもそうでないともどうにでもいえる。

以上の(d)(e)(f)(g)に共通している点は、そのいずれもが現実の起こりうるすべての現象と矛盾しない、という点にある。換言すればいかなる事態が起きようとも間違わないのである。ということは、現実について何も説明していないことと同じなのである。

説明されるべき現実というものは一重要なことであるが一時間と空間の軸（時空軸）によって限定された範囲に存在するものである、ということ忘れてはならない。言い換えれば、その範囲以外の現実まで説明する必要はないし、むしろしてはいけないのである。われわれは、自分の仮説の妥当性を拡大しようとして、何でも説明できるような仮説を作ろうとするが、それは、説明の時間

的・空間的範囲を拡大することではないのである。この点は、われわれがよく勘違いする点であるので注意が必要である。

そこで、その点を踏まえて次の2つの点を検討することとしよう。まずその第1は、反証可能性には程度ないし度合というものがあるのかどうか、という問題である。現実には、上に示されたいくつかの例文のように単純にはいかないだろうからである。さらに第2は反証されていない間の仮説の位置づけである。反証可能性という以上、いつかは反証(否定)されるかも知れないわけであるが、否定されればそれはそれでおしまい(科学的ではなくなる)であるが、いつ反証されるかはわからないからである。それでは反証されていない間は仮説であるのかそれとも理論であるといっ

てよいのかどうか、である。

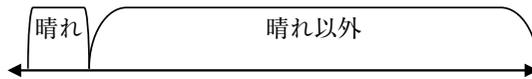
まず第1の点について、以下のような事例を参考に考えてみることにしよう。

- i. 明日の東京の天気は晴れか晴れ以外のどちらかである。
- ii. 明日の東京の天気は晴れか曇りか雨である。
- iii. 明日の東京の天気は晴れか曇りである。
- iv. 明日の東京の天気は晴れである。

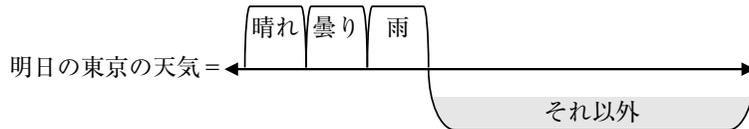
この4つの例文を同時に以下のような図を使って示してみることにしよう。

これらの例文の内、iは反証可能性のない従って科学的でない言明(文章)であることはすでに指摘した。すなわち反証可能性はゼロである。こ

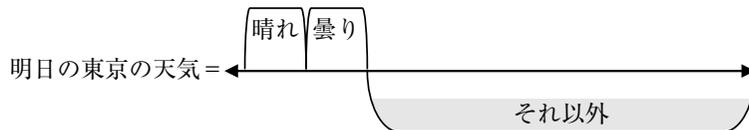
- i. 明日の東京の天気は晴れか晴れ以外のどちらかである。



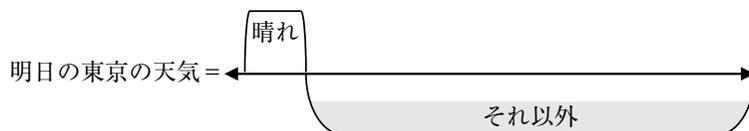
- ii. 明日の東京の天気は晴れか曇りか雨である。



- iii. 明日の東京の天気は晴れか曇りである。



- iv. 明日の東京の天気は晴れである。



これは現実について何も説明していない経験内容がゼロの説明といってよい。

では、ii からivまでの言明（例文）は、反証可能な言明（科学的言明）として同格であるのか、あるいは程度の差があるのでしょうか。一瞥して分かるように、この3つの言明はii→iii→ivとなるにつれて、(←——→)の上側に含まれる言葉（天気上の用語）が減少している。すなわちiiは「晴れ」「曇り」「雨」そしてiiiは「晴れ」「曇り」そしてivは「晴れ」である。この3つを比較すると、iiの言明がより間違いが少ないことは容易に気付く。つまり明日の天気が晴れであろうと曇りであろうと、雨であろうと正しくなるからである。iiiは晴れと曇りの場合に正しい。iiに比べれば雨の場合は間違い（可能性）を持っている。そして、ivは晴れの場合だけに正しい言明となる。一見するとこの場合、iiの言明が間違いの可能性が低いのが故に、より正しいしたがって、科学的な言明であるように感じられるかも知れない。

しかしここで、上に指摘した、現実を説明（予測）することは、現実の範囲を狭めることである、という点に留意する必要がある。従って、ii→iii→ivという順序こそが明日の天気という現実についての範囲をより限定しようとしていることに気付くべき点なのである。

まず上図の矢印←——→は、天気に関わるすべての内容、すなわち全要素を表している。そして、上図のii～ivの中の「晴れ」や「曇り」や「雨」の部分は説明（予測）されるべき現実、すなわちそうなるであろう「明日の天気」に相当する部分である。そして、「それ以外」の部分は、説明する必要のない、明日の天気としては存在しない内容（現実）の部分である。この明日の天気として存在しない内容とは、言い換えればiiからivの説明に対してそれぞれ反証可能な内容である。

例えば、iiの例で言えば、その言明に対する反証可能性の内容は、例えば「雪、みぞれ、台風……」があり、iiiの例でいえば、iiの反証可能な内容に「雨」が加わることとなる。そして、ivの場合には、さらに「曇り」が加わる。

このように、今日の段階では、ii→iii→ivの順番で、反証可能性が高いことがわかる。そして、明日になってもし天気が「晴れ」であった場合、ii、iii、ivのいずれも誤りではないが、しかしii→iii→ivの順番でよりよい仮説（理論）であると評価されるのである。ただ、もし明日の天気が「曇り」の場合はどうであろうか。この場合は、ivは誤りでiiよりもiiiの方がより優れた仮説（理論）とされる。

すなわちii→iii→ivの順でそれぞれの仮説はよりレベルが高いのであるが、それはまたiiよりもiiiが、iiiよりもivがより情報内容が多いからである。多い、と述べると感覚的には不思議な感じではあるが、横線矢印の上の山（ \cap ）の数を見てはいけないのである。この数は決して情報量すなわち説明力の大きさを表しているものではない。

ここで重要なことは、情報量や説明力の多さは下の枠、すなわち「それ以外の部分」にあるのである。ここは、当該仮説を反証する反証事例が存在するところであり、これは前述の潜在的な反証事例（potential falsifier）である²³。そして、この潜在的な反証事例に関していえば、iiのそれはiiiのその部分集合であり、iiiのそれはivのその部分集合となる。このことは、それぞれiiよりもiiiのほうが、そしてiiiよりもivの方がより反証可能であり、それだけ情報量が多いということになるのである。

ではいかなる理由で、反証可能性がより高いほうが情報量が多く、より優れた仮説（理論）となるのであろうか。というのは、帰納法を発見の方

法としない批判的合理主義にとっては、科学の発見はいわば何でもかまわない(と言う訳ではない)。現実を説明する場合、ii, iii, ivの説明内容を勝手に思い浮かべたり、はたまたまコイントスでもしてたまたま当たったということを意味しているのではない。つまり、iiとiiiとの比較で言えば、なぜiiiの言明において、「雨」の存在を否定し、iiiとivとの比較においてはivの説明者はなぜ「曇り」の存在を否定しえたのか、という理由が重要となるのである。

この点は以下に述べる「認識の進歩」に関わる内容である。この部分が、反証可能性がなぜ論理実証主義のそれよりも優れているのかの一つの根拠でもある。

4-1-3. 科学的説明の構造—反証可能性の増大と認識進歩—

現象を説明する科学的方法として、今日でももっともその基礎となっているのはいわゆるヘンペル=オッペンハイムモデル(Hempel=Oppenheim Model)と言ってよい²⁴。このモデルは通常「演繹的・法則的説明モデル(D-N説明: Deductive-Nomological Explanation)」とも呼ばれ、説明対象である現象を説明する言明である「被説明項(explanandum)」は、特定の現実の状況を説明した「初期条件(initial conditions)」と「一般法

則(law)」から論理的帰結によって演繹的に導出される、というものである。

その構造を簡単に示すと以下ようになる。

「法則」とは一般に「すべてのAはBである」といった命題として表される。個々の事象の観察言明である初期条件(C1, C2……)は、法則(L1, L2……)に包摂されて説明されることになる。つまり、この包摂関係にある「説明項」から「被説明項」を説明する構造になっている。この意味で、ヘンペル=オッペンハイムモデルはまた「被覆法則モデル(ないしカバー法則モデル: covering-law model)」とも言われる。

よく使われる例でこの構造を説明してみよう。

「すべての人間は死ぬ」……L

「アリストテレスは人間である」……C

「故にアリストテレスは死ぬ(死んだ)」……E

このD=Nモデルはいわゆる三段論法と同じ構造をもっており、またこの例からもわかるように、予測を含んだ説明とともに因果説明も示すことができる。

ところでこのモデルは、科学的説明にとって不可欠である2つの条件をかなりはっきりと示していることがわかる。その1は、説明されるべき現象を説明するにあたって、その説明ないし説明の過程が論理的に矛盾しない、ということである。

さて、もう1つの条件は、経験的テストの可能

[演繹-法則的(D-N)説明]



性である。論理的妥当性については、すでに見たように、「論理的（形式的）に真」という場合があるが、これはわれわれの意味する科学的命題ではない。その意味で前者は必要条件ではあるが、十分条件とはなっていない。われわれの意味する科学が、経験科学であるということは、簡単に言えばその説明が経験的にテストできることを意味しているからである。

もっとも、現実には様々な事象を説明する場合には、複数の状況を加えることがある。すなわち、「他の条件を一定にして」といういわゆる「セテリス・パリブス条項 (ceteris paribus)」を加えつつ説明する場合である。また、完全な普遍法則ではなく、この現実が生起する確率は80%である、という確率法則（論）を導入する場合である。

いずれにせよこの演繹―法則的 (D-N) 説明の成立の条件は以下のようにまとめることができる。すなわち、

- ①「一般法則」が経験妥当性を持っていること。
- ②「初期条件」が経験妥当性を持っていること。
- ③「初期条件」がカバーされていること。
- ④「E = 被説明項」が経験妥当性を持っていること。

である。

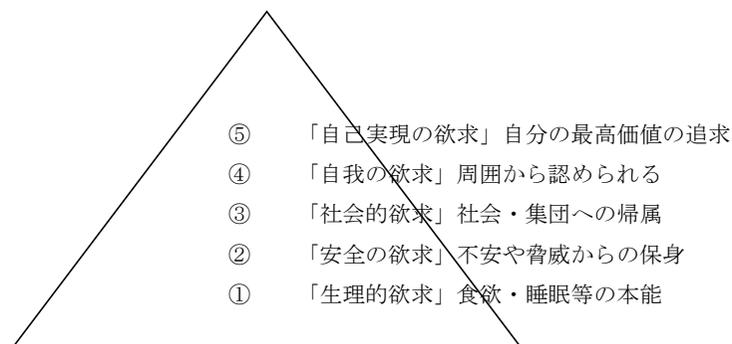
以上の反証可能性の考えを用いて、経営学のテ

キストなどでよく使われるマズロー (Maslow, A.H.) の欲求段階説に当て嵌めて彼の段階説の経験妥当性を見てみよう。彼の「欲求段階説」は、人間の欲求が食欲といった本能的なもの（「生理的欲求」）から、最終的には自分の最高の価値観に基づく欲求（「自己実現」）に至る過程を説明したものである²⁵。

マズローの5つの人間欲求のうち、①から④までは何らかの反証事例が考えられる。しかし、明らかに⑤の「自己実現」についてはどのような状況になろうとも「自己実現」した、という説明が可能である。換言すれば、反証可能性が無い。現実的に言い換えると、この「自己実現」という言葉は“誤魔化し”ができ、使う側にとっては都合の良い非常に便利な言葉となる。それだけに注意が必要である。

以上において、インターナルアプローチとしての科学論的側面を説明してきたのであるが、以下にそうした方法論をベースに持ち、インターナルアプローチの特徴をよくあらわしている主としてわが国の経営学説研究を紹介・検討することとしよう。

図表 欲求段階説



4-2. インターナルアプローチとしての経営学説史研究

4-2-1. 小島三郎の学説史研究

わが国の経営学説史研究においてその方法論的観点をもっとも明確に示した一人である小島三郎の学説史研究を取り上げてみよう。彼の研究は、本人の分類を参考にすると 3 つの研究時代に区分される。第 1 は、『ドイツ経験主義経営経済学の研究』（1965）に代表される時期で、「ドイツ経営経済学の生成期から第 2 次世界大戦の前夜までのドイツ経営経済学の発展」を検討したものである。第 2 は、『戦後西ドイツ経営経済学の展開』（1968）で、「第 2 次世界大戦後の混乱・復興期から 1960 年までの西ドイツ経営経済学の展開過程」を明らかにしたもの。第 3 は、『現代科学理論と経営経済学』（1986）で「1960 年代初頭から今日（1981 年）までの西ドイツの経営経済学の深化過程の分析」²⁶を試みたものである。

ところで、この 3 つの時期の中の前の 2 つの時期において、小島は本稿でいうエクスターナルアプローチを（無論のことながら小島はこの用語を用いてはいないが、筆者の考えではほぼ間違いなく）取り入れようとしたと思われる。言い換えれば、エクスターナルアプローチが意味しているところを“先取り”していたと言えようか。彼自身はおそらく気づいていなかったであろうが、（1965）『ドイツ経験主義経営経済学の研究』の中でドイツ経営学の背景としての生成期の当時のドイツの経済社会状況について述べている。

彼の（1965）の「第二節 社会科学成立の条件（一）」の中で、19 世紀後半頃からのヨーロッパにおける産業ないし各工業部門や機械能力の増加のデータを挙げ、それに関連しての株式会社の興隆を経営経済学成立の主たる要因としている²⁷。

これは、彼自身が学問の誕生や生成発展に関わる周辺の諸状況に関心があったと共にそれを無視できないと考えたからであろうと筆者（大平）は推測する。もっとも小島が本書を著した当時はまだインターナルアプローチやエクスターナルアプローチの用語や科学史の考えが経営学においてまだ知られていなかった事は考慮に入れておく必要がある。

しかしその後皮肉なことに小島は、自らの方法論的立場からエクスターナルアプローチ的な側面を取り去り、ポパーの批判的合理主義を中心とするインターナルアプローチとしての方法論的立場を純粹かつ積極的に展開する。

もちろん、これらの書物以外にも多くの論文があるが、それについてはまた適宜触れることとしよう。これらの 3 冊のうち、前 2 冊においては、科学哲学的立場として、ウェーバーないし新カント派の立場を強く意識して展開されている。それと関連して、ドイツの方法論争におけるいわゆる理論学派に強い親近感を持っている。すなわち第 1 の著書について小島は「そのウェーバーの科学理論における自然科学と社会科学の方法二元論と、かの理念型概念の科学性に多少の疑義をいだきながらも、一応ウェーバーの基本思考を基底とし、そのような方法論に立つ経営経済学を分析したのであった」²⁸と述べ、さらに第 2 の著書については「いわゆる分析哲学にかなりの関心と理解を持ちながら、どちらかといえばウェーバーの方法論と分析哲学の折衷のような科学理論に立脚し、理論学派経営経済学、すなわち経験科学としての経営経済学を展開しようとする人々の経営経済学説に検討を加え、その評価すべき点と理論的矛盾とを指摘し、学説的省察を加えた」²⁹とある。

さらに第 3 の著書においては「そして 1960 年代に入ると、科学哲学界自体の 1950 年代の論争を

契機とし、ポパーの批判的合理主義とカルナップ (R. Carnap), ライヘンバッハ (H. Reichenbach) 等の論理実証主義の異動も鮮明となり、また西ドイツ経営経済学界にもこの両者の立場が色濃く影を落としはじめたので、筆者も本格的にこの方面の研究に専心した……筆者の約30年にわたる経営経済学の研究経過のあいだには、筆者自身、その科学観なり科学哲学がまったく変わらなかったとはいえない。それどころか、明らかに筆者の立つ科学論は、大別してウェーバー (M. Weber) 的なものからポパー (K.R. Popper) の批判的合理主義を基底にしたものへと変化している。……筆者自身このウェーバーの方法論とポパーの批判的合理主義的という科学哲学が世間でいわれるほど異なっているとは考えないが、しかし、筆者の科学観が多少とも変化したことには変わりがない³⁰と。

彼の学説研究の流れを概観すると、第1と第2の書におけるように、方法論的にはまず最初に新カント派とりわけウェーバーの影響が非常に強く見受けられる。この経緯は、特にドイツの経営学 (説史) 研究を行ってきたものとしては自然な流れではあろう。今となっては推測ではあるが、小島はわが国経営学会における翻訳紹介的研究 (pre-internal) に飽き足らず、また自分自身の方法論への関心から、時代的な意味でも最初はウェーバーや新カント派を中心とする研究に、その後は批判的合理主義をベースとする方法論研究に進んだと考えられる。

ただ、先に小島が「筆者自身このウェーバーの方法論とポパーの批判的合理主義的という科学哲学が世間でいわれるほど異なっているとは考えない」と記しているが、この点については若干議論の余地があるかも知れない。科学哲学研究において、両者の類似性を指摘する研究は皆無であるし、むしろ新カント派よりもポパーの方法論の方が、

現実をよりよく説明できる、としてもよかったのではないか。そして、より良き方法に向かって前進するという意味でこの自らの変換を捉える方がよりポパー的でもあったであろう。もちろん、それまでの自分の立場を否定するとまではいかないものの、小さくない転換を認めることに躊躇があったのであろうか。ただ一つ記しておけば、こうした自らの方法論的立場の変容を正直に記すことこそ、ウェーバー的「知的廉直」の立場を貫いていると (も) 言えるのではないだろうか。

ただここで留意すべきは、いずれにせよ彼の学説研究を貫いている方向は、経験科学としての経営経済学ないし経営学説研究の探究にあり、その意味では科学研究に対する研究態度は一貫しているといえよう。さらに付け加えるべきは、こうした自らの科学哲学 (方法論) 的立場の変容を明示している点である。研究者にとって、自らの立場の変更を表明することは決して軽いものではない。特に、学説研究に関わる科学哲学 (方法論) 的立場に関しては特に言えることである。こうした批判的精神は、彼の学者としてのあり方を示すものであると共に、後に触れるように、(近代) 科学 (者) としての本質的な資質を彼が有していたことの証明でもある。そして彼の研究の対象と彼自身の科学哲学 (方法論) 的関心は批判的合理主義へと進んでゆく。

更に、批判的合理主義の方向において明確に科学哲学的立場を持って学説研究を進めている一人として、小島よりもやや若い世代の永田誠を挙げることができよう³¹。永田が著した3冊の著書の内で、(1973)『経営経済学の展開』はグーテンベルクの検討が中心のやや「解釈的」著作であるが、最終章「第8章 経営経済学と批判合理主義 (ママ)」において、ドイツの経営経済学会において当時影響を持ちつつあった批判的合理主義に触れ

ている。(1979)『経営経済学の方法』と(1995)『現代経営経済学史』は、ポパー、クーンそしてラカトシュの科学論を踏まえてドイツ経営経済学の展開を方法論的に、特に批判的合理主義の視点から論じたものである。この意味で彼の諸著作も小島と同様にインターナルアプローチの著書である³²。彼の著作についてはまた別の機会に委ねたい。

4-3. インターナルアプローチと理論負荷の問題—エクスターナルアプローチへの架橋—

「4-1-1」の論理実証主義の項の後半部分において、帰納主義への批判の1つとして「理論負荷性」に触れた。これは考えればわかるように、単に帰納主義だけの問題ではなく、広く経験主義全体に当てはまる問題である。従ってインターナルアプローチに対しても避けて通れない問題である。

この意味では、データから直接テスト可能であるとする素朴な検証も反証もありえないこととなる。確かにポパーのいう反証可能性の考えは、「可能性」であって永遠にそれを主張する限りにおいて一見「理論負荷」を回避できるように見えるかもしれない。しかしそれはつまりところ「認識進歩」の考えと矛盾する。

従ってインターナルアプローチと理論負荷の問題は単なるそれぞれ別個の問題ではなく、この2つの関係を如何に克服するかという新しい課題をわれわれに突き付けているといえるのである。しかもアカデミックな意味での「合理主義」の範囲を逸脱することなしに、である。

この問題は、物理学においてかつてあった論争、すなわち世界は神が創ったものであるのかそれとも与件としてのそれであるのか、である。いずれにせよ(筆者は後者であるが)世界(現象)に対して真摯に向き合いそれを正確に説明していくのが研究者の使命であり、同時に自分の考え(仮説)

に対して常に問いを発し、やがては覆される仮説を永遠に修正し続ける存在が研究者であろう。

この課題は、次章の「5. エクスターナルアプローチ」のところで試論的に検討することとしたい。

(和書の出版年については元号表記を西暦表記に改めた)

注

- 1 大平浩二(2021)「経営学説の研究(2)—科学史としての経営学説研究の方法:エクスターナルアプローチ導入の試み—3. 経営学説史研究の3つの方法—プレ・インターナルアプローチおよびインターナルアプローチとエクスターナルアプローチの概略的フレームワーク—」『経済研究』(161号)明治学院大学, pp 1-28
- 2 この立場の主要な著作として、ドイツ経営経済学を中心とすると、例えば次のような文献を挙げる事ができる。池内信行(1949)『経営経済学史』理想社, 同(1958)『現代経営理論の反省』, 小島三郎(1965)『ドイツ経験主義経営経済学の研究』有斐閣, 同(1968)『戦後西ドイツ経営経済学の展開』慶応通信, 同(1986)『現代科学理論と経営経済学』税務経理協会, 鈴木英壽(1968)『ドイツ経営学の方法』(増補版)森山書店, 同(1993)『現代ドイツ経営学の方法』森山書店。もっとも、鈴木英壽の論調は、自らの科学方法論的立場を明確にしそこから諸学説の検討を行うというよりは、ドイツにおける方法論的議論をやや解説的に述べている。永田 誠(1973)『経営経済学の展開』森山書店, 同(1979)『経営経済学の方法』森山書店, 同(1995)『現代経営経済学説史』森山書店, 笠原俊彦(1990)「『理想型』による認識と経営経済学の学派分類(一)」『松山大学論集』第2巻第5号, 同(1992)「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号, 山本安次郎(1961)『経営学本質論』森山書店, 同(1967)『経営学の基礎理論』ミネルヴァ書房, 同(1975)『経営学研究方法論』丸善, ドイツ経営経済学ではないが、野中郁次郎(1978)『組織現象の理論と測定』千倉書房, また、マーケティングではマーケティング史研究会編(2002)『オルダーソン理論の再検討』同文館等々である。他にも幾つか挙げられようが、まずはこれくらいにしておきたい。
- 3 この意味で本稿では新カント派は取り上げない。
- 4 この点についての概略説明は例えば『岩波科学・

- 思想事典』pp 401-403 を参照。
- 5 沼上 幹 (2000) 「われらが内なる実証主義バイアス」『組織科学』(V. 33 N. 4, pp 32-44)
- 6 この図4-1 は大平浩二 (2016) 『ステーキホルダーの経営学 (第2版)』 p 293 を基にしている。なお、この図は次回以降の拙稿において再構成される。
- 7 ウィーン学団のメンバーについては, Hessenbruch, A. ed. (2000), *The History of Science*, London·Chicago, Fitzroy Dearborn Publishers, Moutner, T. ed. (1996), *A Dictionary of Philosophy*, Oxford, Blackwell Pub. 等を参照。
- 8 カルナップ (1977) 『哲学論集』1977, p 37-38
- 9 Chalmers, A.F. *What is This Thing Called Science?* 2ed. Uni. of Queensland Press, 1982, 高田・佐野 訳 (1985) 『新版 科学論の展開』恒星社厚生閣, p 19 以下を参照。なお, 論理実証主義の解説は, チャルマーズの説明に負うている。
- 10 チャルマーズ (1985) p 37 を参照。村上陽一郎 (1974) 『近代科学を超えて』日本経済新聞社, とりわけ pp 13-15 を参照。
- 11 チャルマーズ (1985) p 25
- 12 村上陽一郎言うところの「ベーコン主義」ないし「素朴なベーコン主義」である。村上陽一郎 (1974) 日本経済新聞社 pp 13-14。(1997) 『新しい科学論』講談社
- 13 Hume, D.; *Treatise of Human Nature*, 1739, また, *A Dictionary of Philosophy*, p 208 を参照。
- 14 Popper, K.R. (1951), *The Logic of Scientific Discovery*, 大内・森訳『科学的発見の論理 (上・下)』恒星社厚生閣, 1971-72, を参照。
- 15 Hanson, N.R., (1958) *PATTERNS of DISCOVERY*, Cambridge University Press. 村上陽一郎訳 (1986) 『科学的発見のパターン』講談社学術文庫
- 16 この考えの更に強力な主張者がファイアーアーベントである。付言すれば, クーンのパラダイム論は基本的にはハンソンの考えを踏襲しているといつてよい。この考えでは, 観察は主観を伴うものであるから, 文字通り客観的であったり正しい認識はない, というものである。
- 17 同じ経験主義者であるポパーは次のように言っている。「観察およびそれ以上に観察言明と実験結果の言明は, つねに観察された諸事実の解釈 (interpretation) であり, 理論の光に照らされた解釈であるということ, これである」と。(1951) p 134, そしてさらに本文の「見えるものを見えないモノ」の指摘については, Popper, (1963) を参照。
- 18 新村出編 (1983) 『広辞苑』(第3版) 岩波書店, p 507
- 19 クワインとデュエムを。
- 20 「退行的プログラム」(degressive program) progressive については, 例えば次を参照。Lakatos, I./Musgrave, A. ed., (1970) *Criticism and the Growth of Knowledge*, Csmbridge, 森 博監訳 (1985) 『批判と知識の成長』木鐸社
論理実証主義に対する批判的見解には, ポパーやラカトシュ以外にも, デュエム (Duhem, P.), クワイン (Quine, W.V.O.) そしてハンソンやファイアーアーベント等からの批判がある。デュエムは, 学問全体の領域を1つの有機的統一体 (全体論 = holism) として考え, 個々の (観察) 理論に還元されるものではない, とした。クワインは論理実証主義には分析命題と総合命題の区別, そして還元主義の2点がドグマであると批判した。ハンソンとファイアーアーベントについては後述する。
- 21 例えば, 関 雅美 (1990) 『ポパーの科学論と社会論』勁草書房を参照。
- 22 いわゆる湾岸戦争当時のイラクのサマワにおける自衛隊の安全についての小泉首相 (当時) の答弁。
- 23 Popper, K.R. (1951), *The Logic of Scientific Discovery*, 大内義一・森 博訳 (1971-72) 『科学的発見の論理 (上・下)』恒星社厚生閣, を参照。とりわけ訳書 (上) の pp 95-113 などを参照。
- 24 このヘンベル = オッペンハイムモデルは, またポパー = ヘンベルモデルともいわれる。『岩波哲学・思想事典』p 1326。また, Popper (1951) pp 70-74, Hempell, C.G. (1965), *Aspects of Scientific Explanation: and other essays in the Philosophy of Science*, New York: Free Press, C. ヘンベル (長坂源一郎訳) (1973) 『科学的説明の諸問題』岩波書店, Hempel, C.G. (1966), *Philosophy of Natural Science*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, 黒崎宏訳 (1967) 『自然科学の哲学』培風館を参照。
- 25 Maslow, A.H., (1954) *Motivation and Personality*, Harper & Raw, (小口訳 (1971) 『人間性の心理学』産業能率短期大学, なお, この図はマズローのオリジナルの図をわかりやすいように変えている。
- 26 それぞれの引用は, 小島三郎 (1986) 「はじめに1ページ」なお, この第1の書において小島は, 経営学ブームの今日において (当時) こそ「経営経済学の方法論的基本問題と学説史の検討」の必要性を説いている。この問題意識は, 内容は異なるが, 池内の考えと基本的には同様である。また, 本書の第一章「経営経済学方法論」において小島が, 社会科学成立の条件なる節を設け, 科学成立の条件を「社会的, 文化的価値関係」と「科学のルール」にもとめていることは注意する必要がある。これは, 小島

なりの経営学研究における、「史観とその方法」である。ここでの小島の方法論的観点は、すでに見たように、ヴェーバーならびに新カント派の立場に立っているので、ここでの内容がそのままその後の彼の方法論的視点（批判的合理主義）に結びつくものではない。ただ、彼が「方法論的基本命題、科学の性格、その歴史等はいずれも有機的に考察されなくてはならない必然性がある」と指摘している点は重要である。同書 p 5。また、詳細については小島の（1965）ならびに（1968）を参照されたい。なお、筆者（大平）の一連の文献も、小島同様「特定の科学方法論に基づいた学説研究」の分類に入ることとなる。例えば以下の論文。（1982）「コジオール経営経済学の方法論的研究」『経済研究』（明治学院大学）65号。（1984）「R. マテシッチの一般理論について」『経済研究』69号。（1985）「理論の共約不可能性問題について」『経済研究』72号。（1986）「モクスターの経営経済学について」『経済研究』75号。（1987）「意思決定志向的経営経済学の検討—E. ハイネンの学説を中心として—」『経済研究』79号。（1988）「経営経済学的組織論の展開—E. グロッホラを中心として—」『経済研究』81号。しかし、1990年以降の文献は、エクスターナルアプローチを意識したものである。（1990）「経営経済学におけるパラダイム論の受容について(1)—イエーレの所論を中心として—」『経済研究』86号。（1990）「経営経済学におけるパラダイム論の受容について(2)—イエーレの所論を中心として—」『経済研究』87号。（1991）「経営経済学におけるパラダイム論の受

容について—シュナイダーの所論を中心として—」『経済研究』90号

- 27 小島三郎（1965）pp 7-12
 28 小島三郎（1986）「はじめに」pp 1-2
 29 小島三郎（1986）「はじめに」pp 1-2
 30 小島三郎（1986）「はじめに」pp 1-2、むしろこうしたウエーバーないし新カント派の科学観と論理実証主義や批判的合理主義のドイツ経営経済学会の影響については、例えば Gutenberg などの世代の学者にはその咀嚼と受け入れは難しかったのではあろう。当時としては、わずかに若い Kosiol や Heinen などはある程度の言及が見られる。Kosiol のシステム論や Heinen の意思決定論である。従って、鈴木英壽が紹介したように、ドイツでは当時の若手であった、Köhler, R., Schneider, D., Katterle, S. などの世代が積極的となったのである。この意味でも、当のドイツにおいても（限らないであろうが）方法論的には大きな断絶が生じていたと言えよう。この論理実証主義と批判的合理主義については大平浩二（2016）を参照されたい。
- 31 永田 誠（1973）『経営経済学の展開』、（1979）『経営経済学の方法』、（1995）『現代経営経済学史』
- 32 もっとも永田のいう「ポパー、クーン、ラカトシュの一般的科学論を自らの方法としてあるいは学史の方法として如何にうけとめたか」（1995）「序文」についてはやや問題があるのではないか。というのは、ポパー・クーン論争に明確に見られるように両者の方法論的立場はかなり異なるからである。